

明珠

龍泉院
参禅会会報

従容録に学ぶ(一〇)

第九四則 洞山不安

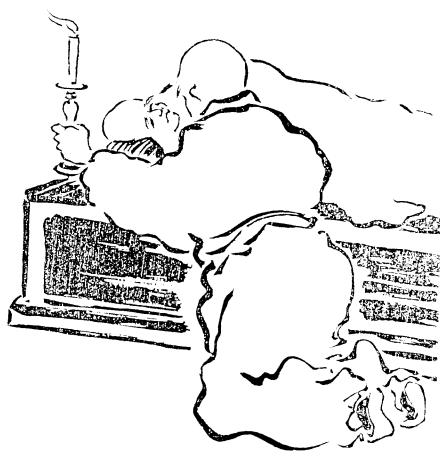
〔示衆〕

衆に示して云く、下、上を論ぜず、卑、尊を動ぜず。よく己れを撰して佗に従うと雖も、いまだ輕をもつて重を勞すべからず。四大不調の時、いかに侍養せん。

〔本則〕

挙す、洞山不安なり。僧問う、和尚病めり、還つて病まざる者ありや。(分疏するに一任す。)山云く、あり。(強いて主張す。)僧云く、病まざる者、還つて和尚を見るや。(世諦に流布す。)山云く、老僧、他を見るに分あり。(本分の相見なり。)僧云く、和尚、他を見る時いかん。(なんの眼ありてか相見す。)山云く、すなわち病いあることを見ず。(ただこれ、肯いて仮りに参ぜず。)

洞山不安



「不安」とは病気のこと、四大不調ともいいます。『従容録』中、病気をテーマとする則には、11「雲門両病」、36「馬師不安」、41「洛浦臨終」、83「道吾看病」などがあります。生老病死という四苦の一つである病いは、古今東西を問わず人間の大問題だからですね。洞山とは、唐末の禅匠、洞山良价(八〇七〜八六九)のこと。若いころ行脚して多くの禅者に参じ、さいごに雲巖曇晟に学んで辞去し、大河を渡る時、水に映るおのれの影を見て悟りを開き、その心境を詩に詠った。これを画題としたのが、有名な「洞山過水の図」です。

龍泉院にあるこの図は、正徳二年(一七一二)に京都宇治の興聖寺宜謙和尚が、中国伝来の古画を版木に刷つて頒布した木版古画ですが、すでに宗門でも稀有の軸となっている寺宝です。

さて、良价和尚は後に江西省洞山の普利禅

院に任し、幽玄な禅風をふるいました。その弟子に、五位思想で有名な曹山本寂を打ち出し、ともに独特の宗風をもって知られたところから、洞山と曹山の一字ずつをとって、この流れを曹洞宗と呼ぶことになりました。したがって、洞山さまは曹洞宗の開祖として仰がれています。語録や「宝鏡三昧」「新豊吟」などの作品が知られ、悟本大師と諡を受けています。

洞山さまは六三歳で亡くなりましたが、病んだときのエピソードがこの則のテーマとなっています。まず、万松の「示衆」をみましょう。

下位の者が上位の者を評論したり、卑賤の者が尊貴の人を動揺させるのはよくない。自分の地位を守って、上には従順にすべきだ。同様に、病いの時は病いに順応するにはどうしたらよいか、というほどの意味です。

下とか卑というと、前近代的な語感がし、また、上位尊貴への順従などは封建的の最たるもの、という非難があるかもしれません。ただ、これらの言葉は、万松の生きた元の専制国家という時代社会性と、洞山の禅風の中に、君と臣の關係を用いて世界の真実相を説いた「君臣五位」という思想があ

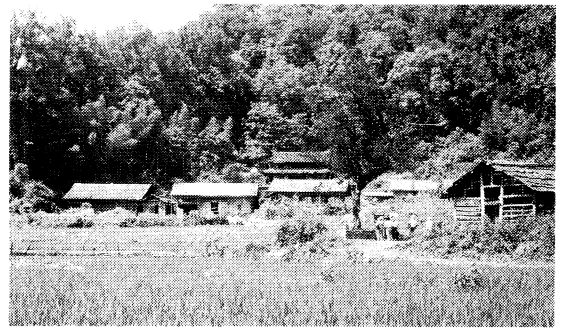
り、これをふまえていることを知れば、あえて言葉じりだけを問題にする必要はありません。

次に「本則」です。洞山が病いのとき、僧「いま和尚さまは病んでいますか、病まない者はいいますか」「あるさ」「その者は和尚さまを看病する人ですか」「いや、むしろわしが看病するんじゃない」「はあ？そのありさまは？」「病いを離れた心境じゃ」。

肉体は、地水火風という四大和合の上に成り立っています。その不調の時が病いとなって肉体の上に現われるのですから、もともと病者と不病者は別人ではない、それを分けている僧は、まず相対的な見解におちているのです。一方、洞山はそんな区別をせず、病も不病もおのれ本来の面目であることを透徹している、だから病いを離れた心境になれるのですね。

時間も空間もこえ、人間的なすべてのはからいをこえて、大きな大きな大宇宙の真実のはたらき、真理のありさま、それが本来の面目ですから、それは病むことも老いることもない道理です。洞山はすでに生死のしがらみを透脱していたので、重病にあってもいささかの動揺もなかったのです。

注意すべきは、看護するとかし



洞山普利禅院の現況

ないとかいうと、主客の別があるようにきこえますが、それを洞山はあえて否定するために、病者が不病者を看護する、と逆説的にいつているのです。万松はこの語を「本の相見」といってほめ讃えています。自分と本来の面目とが一枚になったすがた、だということです。そういえば、さきの過水悟道の偈も、おのれと真理との一体性を高らかに詠じた詩でした。

ふりかえって、私たちが病氣や大怪我をしたとき、精神的肉体的な苦痛と動揺はいかばかりでしょう。あらぬことに心悩ますのが常ですね。仲々、病いをこえるなど

ということとは至難のわざです。この辺に、道理と現実との大きなへだたがりがあり、凡夫と祖師のちがいを思い知らされます。

わたくし自身、実は病いについてはさして語る資格などありません。入院の経験はたった三日だけ、それも尿道結石の疑いで苦しんだのは一日だけで、すぐ快復して退院しました。大怪我も経験しませんでした。しかし、六年間に痛風を病み、その後ずっと治療を続ける過程で、ありがたいことに少しずつ病いに対する目が開けてきたと思います。

もちろん、良寛さんのように、「病いの時は病いになるがよく候」という達観した心境や、洞山さまのような病も不病もこえた悟りの境地にはなれそうもありません。しかし、坐禅の時に坐禅になり切れれば、病いの時もまた病いになり切れるはずで。せめて、病いの時はジタバタせず、こうなったから病いに徹して、明日の活力のためにゆっくり休養してやろう、と観念につとめたいと思います。本来の面目が休ませてくれる、と思うようになりたいものです。





第七回成道会参加者一同（H 1.12.10）

第七回成道会の円成

一炷心香尊像前
同時成道憶昔年
今去古来真如相
夜夜星光照大千
慈悲容納
初発心時成正覺
悲思量処箭離弦

一炷の心香、尊像の前、
同時成道、昔年を憶う。
今去古来、真如の相、
夜々の星光、大千を照らす。
慈悲容納
初発心の時、正覺を成じ、
悲思量の処、箭、弦を離る。

第七回目を迎えました成道会は、平成元年二月一〇日、竜泉院で例年のとおり厳粛に行なわれました。椎名老師と、隋喜僧二名のご指導により、当山参禅会員二九名の方々が参加されました。

ご老師のご法話は、まず成道会とは自分にとってどんな意味があるかを自覚することが大切であること。そして誰れもが持っている佛心、佛性を執着という「塵」でおおい隠すことなく生きれば、佛の世界は見えてくることを話され、合掌礼拝は基本的な佛行であり、合掌礼拝することは、自分を投げ出して無になり、執着を無くしたまっさらの姿である。参禅会員は、合掌礼拝による挨拶をしようではありませんかとご提案があり、一

同これの実行を誓いあい、精進努力することとなった。

〈参加者〉

木村誠治 宗藤幸生

（以上僧職）

小畑節朗 森岡俊雄 寺田哲朗
平沢満代 神部正 藤原公 徳
山浩 三町勲 四宮清二 高野
千代子 中嶋南洲男 沢村国勝
青柳守英 金崎央 染谷はる
五十嵐嗣郎 杉浦上太郎 下村
忠男 武田博志 佐藤征志 河
谷博 添田昌弘 清水利一 宮
田哲男 佐藤初恵 井野輪進
石井つや 盛敏夫 小川弘美
（以上当山参禅会員）

従病記

―お礼に代えて―

沼南町 高間 利介

昨年一月に入院してかれこれ二ヶ月、この間お見舞いを頂いたりご心配をおかけしたり大変ご迷惑をおかけ致しました。そこで徒然

と言っは申しわけありませんが、感じたことを申し上げたいと思います。実は、最初の手術の麻酔がよく効いて、「一年ぐらいたてば麻酔も覚めますよ。」と言う医師の言葉を信じて、安心はしていましたが物忘れもひどく、またこれから申し上げることも、覚え違いや、順序も間違っているかも知れませんが、予めお許しをいただきました存じます。

私は、高血圧、糖尿、肝臓、心臓等の悪いことは承知していましたが、まさか「癌」にかかるとは思っていませんでした。父方にも母方にもこの傾向はありませんし、私は大丈夫と思っていました。それで、もし身体が不調になっても入院だけはしたくない。昔から灸、鍼、温泉、などの療法があるし、もし入院しても前に申し上げたような病気があって結局はだめなのだからと、お知合いや、家族

の勧めにも頑強に抵抗しはねつけておりました。

しかし、前からお世話になってる医師から一度検査を受けるようにと柏の病院に紹介されました。私には、先程申ししたように、いろいろ病気があって、それで、あちこち切られて多分駄目になるかも知れない、このまゝでも多分一ヶ月の命かも知れないと思い、



70余年を経ている大ツツジ

一ヶ月の猶予を願ったところ、「多分その頃は来院されなくてもよい、それまでの保証は出来ない」と宜せられました。同行した家内は、「是非入院をさせて下さい。」と院長に申しますし、私もここで

意地を通すわけにはいかないと判断し、その場で入院させて頂きました。検査だけで一週間はかかるだろうその間は手術だけは待って貰えるようになるだろうと思っていたのですが、すぐ胸から直接点滴が入るようになりました。手術の準備に入ってしまった。そして手術前の検査でCTという連続レントゲンにも、エコーという超短波検査にも異常の個所が現われ、T大学病院に紹介していただきました。そして、こちらにもベッドがないから、一週間か一〇日ぐらいはこちらで点滴して体力をつけてから転院しようということだったのですが、その後、直ぐ入院するようにということになりました。しかし、再検査の結果、T病院でも処置が出来ず、本部から専門の先生が見えるまで一〇日間位の間があるということになりました。しかし、この半年前に知人のお子が突発的な病気になるC大付属病院に緊急入院したのを家内は思い出し、その伝手から連絡しても

らった処、ベッドが一つ空いているとのこと、そこでT病院はお断りして、またこちらに移りました。めまぐるしい動きで、手術の方もかかった日数はさだかでありませんが、直腸癌ということでありました。それから、二、三日、意識がなかったのに、四月下旬頃には、同室の方が驚くような回復ぶりで退院、自宅療養ということになりました。退院の際、担任の先生の話では、「カルテには手術不能、全く処置なしと書かれてある」そう言って、カルテを見せて頂きました。これは、内科の先生方の総合判断で手術をしないことになっていたのが、外科の先生方の判断で手術に踏切られたものだそうです。そして、「いつまた、どこが痛むか判らないが、何かあったらこちらの病院に運んでもらうように」ということでありました。

帰りましたら、工場の前の広場に新しく砂利が敷きつめてありました。おいでになるお客様の車のタイヤがめりこまぬためにということであつたのです。この一年休んでから、また来年、新しく出直して、お返しの人生を始めようと思っていましたが、これは思い通りでありました。直りつつあるものと油断しておりましたら、一〇

月初め、再びT大学病院に入院することになりました。心臓の動脈瘤破裂による心不全と腎臓機能の不全で、透折療法ということでした。結局透折はせず、昨年一二月自宅に帰らせて頂きました。

只今は、皆様のご指導で「病気に安住すること」「なるよう、いくよう時節に従う」という境地になるよう、とてもなかなか至りませんが、その境地に入りたく祈念

痛み何れより来たる

船橋市 加藤 健之

充分に跳び降りれる高さと思い、はねたのですが、四尺ばかりのフェンスに右胸を強打してしまいました。イメージは五、六年前の二人

の息子と遊んだ男鹿半島の磯、肉体は数えの四八才、このギャップが怪我のもとでした。七ヶ所の肋骨の複雑骨折でその一片が肺に孔を明けてしまいました。胸膜と肺の間に血が溜ってしまい、胸を少し切開してパイプを埋め込んで電動ポンプで四六時中吸引すること一〇日余、痛みに成切ること十分とは言えぬものの自然治癒力に支えられて一ヶ月で退院しました。数日違いで某政党の女性委員長がすべって転んで腕を骨折しており

いたしております。回復したら、今度こそ本気になって人様のためにご恩返しをしようと思うことすら思い上がりで、お見舞い頂く方、お世話頂く方、家内や、息子たち家族にとつて、扱い易い病人になることが一途の道とそれのみ思うようにつとめております。ながながと駄文を弄しすみませんでした。有難うございます。

ました。手なら痛みは同じでも出勤可能だから良いな等と病院のテレビを見ながら考えたものです。

入院中に久参の小畑さんのお見舞を戴き「瑞州洞山録」を拝借致しました。書物を求める時いつも、椎名老師様に言って戴いた「本物を読まねばなりません」というお言葉が頭を支配します。しかし久参の道友が貸して下さる時は全く安心の中でひたすら読めば良く、本当に有難いことです。

当然坐れぬ日々です。行往坐臥全て禅の要諦と言うことが頭の中で空転する凡夫。病になり切れぬ吾我。その上、一つの計らい事を中断せねばならなかったこだわり

が気分のださくれを生じます。



毎年よく咲く、クマガイ草

心秘かに「僧侶の坐禅」と名付けた一炷四五分の坐禅を一〇分の休息（家庭では諸般の事情により経行は仲々出来ないものです）を挟んで二炷行うということに大分慣れて来ておりました。一度だけ参加させて頂いた接心会での基本的な時間配分と感じてその様にして来ました。僧侶に伍して坐っても不様なことはすまいという計らい事の、有難い頓挫でした。

退院して勤めに出るようになって少しずつ坐りました。胸部が痛く、昨週は一〇分しか、今週は五分しか坐れぬという焦りの日々でした。薄紙を剥ぐように痛みが失せて来た日々になふと想いが湧い

て来ました。「何を求めて坐っておるのだらう」ということでした。決して読み流すという軽い気持ちで読んで居たのではありませんが、どこかで禅機の鑑賞の如き二見の心がありました。何度も洞山録を読み返して見ました。無所得無所悟の禅、小生にとっては脚が痛いだけの禅をしたいと心を新たにしました。

左胸を打ったなら孔が明いたのは心臓だった筈です、病になり切り安心の日送りをしたならばもって尊い佛道の風光を恒間見ることが出来たかも知れません。生来の傲岸さ故気付くのが遅く、事象の真只中ではなく、喉元過ぎてからああそうだったのかといういつもの思考パターンの粗末さ加減です。精神修養でない坐り、思考エリートのものでない禅、何一つ特殊なものではない坐禅、私は「僧侶の坐禅」を求めた時に道を誤りました。恥かしさで胸が痛みます。

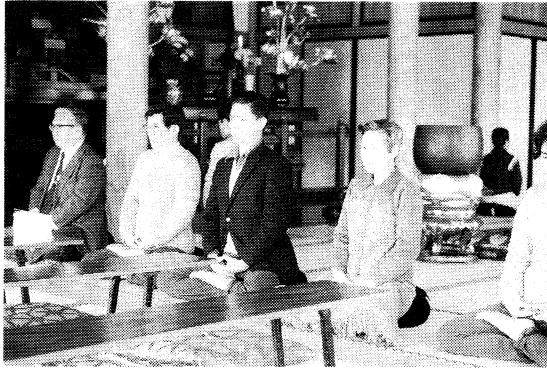
おだやかな冬の故か、文字通り胸の痛みはもうほとんど無くなりました。一月より再びお寺様で坐らせて頂いております。何か判らぬ有難さが幾重にも身心を包んでくれます。もう有難さの分析などは致しません。ひたすら頂くのみです。

小学生の日曜学校

印西町 富田 文子

私の古里の日曜学校は曹洞宗洞光寺でした。学校をお始めになった御住職は川島雲海先生です。この日曜学校の生徒は一年生から六年生までの希望者でしたが大抵、皆遊ぶこと半分によく集まりました。

洞光寺は私の家から四〇分位歩いた山の中の小高い所にあつて祖母父母兄妹の菩提寺です。山門



昭和五八年二月の例会です

を入つて右側の古い屋根の下に三四段に御地藏様が安置してあり、きれいに白く塗つたお顔もあれば頭や体を修理されたり、古く黒々とした、お姿も見かけられました。四月二一日にはその御地藏様を当番の家の者達が一体ずつお連れして家の前に新しい布で幕を張り、旬の野菜やお餅などお供えしますと近在の老若男女がお参りし、家の者はお餅とかおせんべいなどを差し上げる様でした。私達も学校が早引けでしたので、家々を夕方まで廻つていろいろ袋一杯頂いて帰つたものでした。

石段を上りますと海棠の太木があつて春は薄紅色の花がそれはそれは美しく咲き、秋には青黄い実がよく落ちて、それを拾つて噛んで味わたつた酢っぱさ、今何処にも海棠の実など見たこともないことを思うと、多分それは姫りんごであつたのでしよう。

日曜学校は九時から本堂で始まります。小学生達は夏休みのラジオ体操に持つて行くようなカードに印を押してもらひ揃つて正座を

しておりますと、川島先生は足踏みの小さなオルガンをお奏きになつて一同歌を唱います。

昔々、三千年、花咲き匂う春四月 響き互つた一声は 天にも地も我一人

これが一番です、二番は、立派な国に生れ出て 富も位もありながら 一人お城を抜け出て 六年にわたる御修行

というお釈迦様誕生の賛歌であり、今さらながら口ずさんで見ます。四月八日は花祭り、お庭に小さな花御堂、造花の屋根の下にお釈迦様のお姿が飾つてありました。皆、我先に小さな柄杓で甘茶をおかけて、持つて来た瓶とか水筒に甘茶を一杯入れて持ち帰つて家中で頂いたものです。

夏は学芸会があり六年生の男生徒さん達が舞台や幕を作り先生自作の出し物や、学校で発表したうたやダンスをして楽しみ、夕方薄暗い墓地に行き椎の実を拾いそのまゝ噛んだこと、その実を前掛に包んで持帰つて母に炒てもらつたこと。今でも近くの椎の木の実を見ると拾いたい気持ちがしますし、白い小さな実の薄い味わいが心に残ります。

それから、先生の法話です。怪奇な話には、みな身振いしてシユ

ンとなり、又面白い話には大声で笑い賑やかでした。

現在、幾年も訪れていない洞光寺、さぞかし変つたことと思います。古里の同窓会にも欠席がちなこの頃ですし、日曜学校の想い出話をと思つても男性達は戦死、又女性も現在残っているのは半数ばかりでしょうか。

龍泉院に参禅させて頂いてから十年余り、欠席ばかりしている自分を反省しながら、山道を歩きながらふと頭を過ぎるものは日曜学校への道。周囲の景色環境は異なつていても洞光寺と龍泉院との道は同じではなかったか、と思います。椎名老師のご提唱に法話は八〇近い老婦には解明できないことが多いのは当然とは思いますが、心の片隅に残っている十年間の御言葉が次から次へと印象深く感じられる此の頃です。一日も早く足の関節が良くなればと一人で焦れつたがっております。子供達には年のせいだからと言われれば、それもそうだと思ひ、暖かくなれば坐禅は出来なくともせめて、提唱でもと心がけております。先般幹事さんから「身心学道の巻」の提唱中と伺ひ参禅出来る方々を羨しく思います。

最近つれづれに作つた歌です。

春菜里よりとゞき

くりやにて 花咲おりぬ

黄あざやかに

日々のぐち話せば口もと

かえす声 宿命なりと

二云いたびたび

春雨にこぶしの花のうるむ朝

雛あらはしがる孫は男の子

※富田さんの故郷は島根県

大原郡木次町です。

聖語抄

一日、示して云く、古人云く、「善者に親近するは、霧露の中を行くがごとし。衣を湿さずといえども、時々潤いあり」と。謂ふ心は、善人になるれば、覚えざるに善人となるなり。昔、俱胝和尚に任へし一人の童子のごときは、いつ学しいつ修したりとも見えず覚えざれども、久参に近づいたる故に悟道す。坐禅も自然に久しくせば、忽然として大事を発明して、坐禅の正門なることを知るべきなり。

(正法眼蔵随聞記)

おふくろさん

我孫子市 三町 勲

おふくろさんは私にとって生き仏のような存在である。父が亡くなってから八年になるが、それ以来郷里の山口で一人暮らしをしている。近くに私の兄が住んでいるが、「うちは一人の方が気が楽じゃ」と言って、父と住んで居た家から離れようとしなない。

私がたまにおふくろさんのもとに帰ると、「いーちゃんかい」一呼吸おいて「よー帰って来てくれたのう」と、畳に張り付いた仏様のような恰好で迎えてくれる。「いーちゃんかい」と言う問いかけるような言葉は、四人の息子の中の私であることを確認しているのである。と言うのは、おふくろさんは目が見えないので、四人の息子を声や玄関から入って来る足

音などで区別しているのである。おふくろさんの目が普通ではないと、私が気付いたのは四歳の頃である。週に二回か三回、私と手をつないで目の治療に通い始めた。私達が住んでいた街から汽車に乗って、三つ目の駅で降りて小一里行った所に治療院は在った。治療院と言っても普通の農家であつた。おふくろさんが治療されて居る間、私は農家の庭先や周りに広がった田んぼを走り回り、バッタを捕ったり、れんげの花を摘んだりして時間を過ごした。だから治療の内容は定かではないが、歳取ったお婆さんがおふくろさんにお灸をしていたように、臍氣ながら記憶している。

おふくろさんの話によると、私を生んでから視力が段々落ち始め、方々の病院で診て貰ったのであるが、原因が分からず治療のしようが無かったと言ふことである。そんなこともあってか、人伝えに聞いたこの農家のお婆さんの所に、おふくろさんは「藁をも掴む」気持ちで通っていたのだと思

う。効能が無かったのであろう、いつの間にか行かなくなってしまった。ところが、おふくろさんのお寺詣りは今も続いている。自分の不自由な身体に対する精神的なよりどころを信仰に求めたのであろう。私が小学校に上がるまで、おふくろさんのお寺詣りのガイド役は私の役割であつた。

「いーちゃんのことを毎朝仏さんにお願ひしてあるけい」おふくろがよく口にする言葉である。この言葉をいつも挨拶のように聞いていた。しかし、最近になってこの言葉が有難く聞こえてくるのである。時には、私の家族の皆が無病息災であるのは、おふくろさんのお祈りのせいであると思うのである。精神的に壁に突き当たった時など、ふとこの言葉が耳に聞こえてきて、元気づけられることがある。

今日も、おふくろさんが独り祈っている姿が見える、おふくろさんの精神的なよりどころである信仰心が、不自由な自分の身体を忘れさせ、他人のためのものに変わったのはいつの頃であらうか。おふくろさんはそろそろ八〇歳になる。長生きして貰わなければならない。そのエネルギーを与えるために、これからは私がおふくろさんのために祈らなければならない。



下総地方に多い如意輪観音さま

わが心

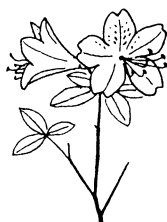
沼南町 佐藤 初恵

七〇幾年、御一緒してきた我が心なれど、未だ定まらず、見えたが消えたり、心身共に一緒の充実感をあたえてくれる事はめったにない。

夜床に着く時、明日は参禅会だから少し早や目に起きて、ゆっくり日課のお勤めをすまし行きましよう。心と心が言いさかすと、「ウン、ウン大分暖かくなってきたからそうしましよう」と納得して寝につく。やがて朝になり目を閉じたまゝ枕元のラジオに手をのばす。ニュースが流れ、天気予報が続く。一日四回さす目のクスリの時間だと、二種類のメグスリをさす。なんなく又布団を上引張る。時間だ、時間だ、起きてと、心が促すけれど、身はついていかず仲々枕から頭を離してくれない。そうこうして、また聞くともなくラジオの放送に身をゆだねウツラ、ウツラ。部屋の時計が怒ったように、ボン、ボンと七時を叩く、しまった今度は心身共に、一緒にはね起き、大急ぎで雨戸を繰り、布団をたたむ、入歯を入れて、髪を整えて台所に走り、急いで顔を洗う。

もう三〇分はとうに過ぎた。お水と、お茶を神佛両方にお供えする。日課のお経を只暗誦する。御詠歌の詠讀は当然の如く休む。然し、朝食のトーストと牛乳、サラダだけは、テレビを見ながらセカセカと食べる。骨を丈夫にするクスリを飲む。食後のコーヒーはかならず飲まないではいられない。心の命令か、身の指令か私にもわからない。然し、これは現実の私で隠しようのない生き方。御老師様は日常の何もかもが、佛の道につながり、坐禅だけが佛道でわなとお教え下さったが、心身一体のさわやかな日々是れ好日は幾つになっても出来得ないとつくづく感じている。

心だけ残して去りし ずるい人
我が心もまた 我が身を離れず
八十路 越えるに重き 欲衣
早くあげたや 南無釈迦佛に

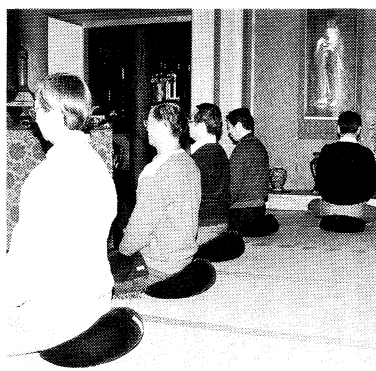


石の上にも三年

野田市 佐藤 征志

坐禅をはじめさせていただいて三年になりました。最初の頃と少しも進歩していないような気がしては、ずかしいものがありますが、毎日の忙しさの中にいたたく、一瞬の静寂な時間は、私にとって心のオアシスとなっております。お客さま相手の目の回るような忙しい毎日の中、冷静に、自分の考え方や生き方を振り返られない自分ですが、坐る時だけは、平静さをとり戻し、勇気と活力が湧き、生活のエネルギーとなっているような気がいたします。

「うどん」と坐禅がどう結びつくかはっきり判りませんが、実生活



成道会にて報恩の一柱

活の中で、ハッと気づかせていただく何かは、やはり、ご住職様の御提唱が少しは身になっているのかも知れません。利潤追求のみでうどんを売ることも出来ず。うどんを売るということは、そう難かしいことではありません。しかし本当にお客様に満足していただけるように売る一杯のうどんは、大変むずかしいようにも思えます。

「どうかこのうどんを喰べてお幸せになつて下さい」と祈れる事が出来るかどうか、お客様お一人お一人を御仏と思えるかどうか、そんなことを思いますと体が熱くなつてまいります。今日も賑うお店の雰囲気の中に、可愛いらしいおじぞうさんの顔や、優しいお釈迦様のお顔が目に見え、うれしく思います。

御仏の心を実生活の中に、どれ程私なりに生かせるか大きな課題です。「たぬきうどん一ちょう、きつねうどん一ちょう」今日もみ仏のご来店。心を綺麗にしてお迎えしたいものです。坐禅とは、私にとって、仏界と、人間界の接点のような気がいたします。

道元禪師眞筆

国宝 普勸坐禅儀 展観

於「日本国宝展」

会期 四月一〇日(火)～五月六日(日)

会場 上野、東京国立博物館

普勸坐禅儀

入宋傳法沙門道元撰

原夫道本圖通乎假修證

宗乘自在何費功夫況乎

全體迥出塵埃孰信拂拭之

手段大都不能當處豈用

修行之跡頭然而毫釐重有

差天地懸隔違順纔起紛然

国宝：天福本『普勸坐禅儀』巻首

道元禪師は中国四ヶ年の参学を終えて、帰国されて間もなく、帰国早々の第一声として『普勸坐禅儀』を撰述されました。

時に嘉祿三年(一二二七年)のことです。

傳林皓堂先生の『普勸坐禅儀をたゞえる』によりますと、達磨大師の坐禅、さらにさかのぼれば釈尊の正法に直結する坐禅、それを行わせるための「坐禅儀」(坐禅のテキスト)ということになります。さらにいえば正法眼蔵の実践としての坐禅、それを参学の同志の要請に応じて書きのこされたものが『普勸坐禅儀』であると。『普勸坐禅儀』には天福本と流布本の二つが伝っており、天福本は道元禪師の眞筆本で、今なお永平寺の宝庫に秘蔵されているものです。この法宝が「日本国宝展」に出品されることになりました。道元禪師が自からお書きになったものは、めったに拝見できるものではありません。書風も宋の黄庭堅と基本となる王羲之の典型とを調和させた俊拔雄健な書風と言われております。どうぞご覧になって頂き、永平高祖の家風の一端を頂戴したいものであります。

各行事のご案内

○常眞寺一泊参禅の集い

日時 六月九日(土)～一〇日(日)

(日)

場所 栃木県鹿沼市下久我九二

○常眞寺

☎〇二八九一六五―八二五三

交通 龍泉院よりバスで往復。

追って案内状をお届けします。

○龍泉院大施餓鬼会

日時 八月一六日(木)午後一時

説教 中野東禅老師(予定)

法要 新盆・山門施餓鬼

○龍泉院第八回成道会

聖僧文珠大士開眼法要

日時 一二月九日(日)午前九時

内容 坐禅・聖僧開眼・成道会

法要・法話・中食・座談

以上、三つの行事を協賛いたします。会員の皆様にはふるってご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。



龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜午前九時より（初参加の方は八時半までに来山のこと）

一、坐禅 止 静 鐘 三声 坐禅

經行 鐘 二声 經行

放禅 鐘 一声 放禅

一、講義 木版三通 開經偈を唱えて『正法眼蔵』の提唱を聞く

講師 龍泉院住職椎名宏雄老師

昭和六三年八月より「身心学道」の巻を提唱中

一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談

正午解散

一、参加資格 年令、性別を問わず、どなたでも参加できます。

一、会費 無料

一、成道会坐禅

月例参禅会の他に毎年一二月の第一あるいは第二

日曜。（本年は二月九日）

釈尊成道を讃え坐禅、成道会法要の後、法話を聴

聞、点心（昼食）を共にする。

沼南雜記

〔参禅会記録〕（一）内は座談

の司会者

平成元年

一〇月二二日

一九名

（森岡俊雄）

十一月二六日

二六名

（小川真澄）

第七回成道会

十一月一〇日

三三名

成道会幹事

藤原 公

同

武田博志

一二月二四日

二一名

（下村忠男）

平成二年

一月二五日

二三名

（五十嵐嗣郎）

二月二五日

二六名

（加藤健之）

三月二五日

二三名

（佐藤初恵）

▼第七回成道会は、平成元年一二

月一〇日、三三名の参加を得て、

無事円成いたしました。龍泉院老

師より高崎直道先生著の『般若心

経の話』を賜わり、又会員の皆様

より祝賀をいただきました。厚く

お礼申し上げます。

▼三月彼岸前の一、原稿をお願い

していた高間先達より御電話が

ありお宅にお伺いし、春の陽ざし

の注ぐ一室で原稿を頂くと共にご

自身の体験を淡々と語って下さい

ました。題を決めるに当って「闘

病記」とでもいたしましたでしょうかと

お伺いすると、「従病記」にして

下さいと笑って答えられました。

又、帰りには日野原重明先生の

『いやし』の技のパフォーママン

ス（春秋社）をぜひ読むように

とお貸し下さいました。「衆生病

むが故に我病む」の金言のごとく、

病の中から私ごときを慮って下

さったことに感銘した次第です。

ご快癒のほどを祈ってやみません。

▼他の方々からの原稿も期せずし

て病いと禅の文章が多かった為、

ご老師にもお願いして、今回は

「病いと禅」の特集としました。

▼本年一二月成道会までに完成予

定の「聖僧文珠大士」尊像は、萩

原清光先生の山梨県の工房で木取

も終り、本格彫刻に入っております。

幾百年の後までも伝える浄業

に一般のご支援をお願いする次第

でございます。

▼提唱を知らせる木版は、全員の

中からお願ひして打版しております

すが、平成二年度は徳山浩氏にお

願ひすることになりました。平

成元年一ヶ年間は四宮清二氏が相

勤められました。一年間有難とう

ございました。

（節光記）